

## 年頭所感

### コロナ禍での学会活動と今後への期待



日本膜学会会長  
姫路獨協大学薬学部 岡村恵美子

日本膜学会会員の皆様、あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。昨年は法人化後2年目に入り、同時に、一昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症に伴う数々の制約の中で学会活動を強いられることとなりました。従来のような現地での対面による会合はほとんど不可能となりましたが、幸い、コロナ禍における学会運営にも徐々に慣れ、試行錯誤や工夫を重ねることによってウィズコロナの新しいスタイルが確立され軌道に乗って来た点は、評価できると思います。このような動きはほぼ全ての学会で当てはまることですが、日本膜学会も例外ではありません。膜学会においても、昨年は6月に第43年会、11月には膜シンポジウム2021が、オンラインではありますが予定通り実施され、活発な議論が行われたことは記憶に新しいことと存じます。関係の皆様方のご尽力に改めて感謝申し上げます。本年は、法人化後、また、なかなか収束が見えないコロナ下で3年目を迎えます。6月の第44年会はすでにその概要が固まり、あとは一般演題を募集するだけのところまで準備が進行していますし、秋の膜シンポジウム2022も、すでに開催準備に向けて舵を切ったところですが、昨年の経験とノウハウを活かして、ますます活発な議論が行われますことを期待しております。

#### 1. 学会活動のさらなる活性化

昨年の就任挨拶にも書かせて頂きましたが、学会活動の基本は何と言っても年会と膜シンポジウムです。「膜」をキーワードに、人工膜・生体膜・境界膜を研究対象とする異分野の研究者が集う歴史と特色のある学会活動の中心として、年会・膜シンポジウムが今後も運営されるものと存じます。昨年はオンラインでの開催が基本でしたが、膜シンポジウム2021では、当時の感染症状況がかなり改善されたこともあり、ハイブリッド形式が試行され、こちらもおおよそ道筋がついたように感じています。まだしばらく、コロナと共生しながら学会活動を継続する必要がありますが、会員の皆様のご協力のもと、今後さらに活性化されることを祈念しております。

さて、学会活動につきましては、理事会を中心にその方向性について議論が展開されておりますが、これに対して、会員の皆様から本会の活動に対して忌憚のないご意見を頂戴することを目的として、法人化後しばらく休止しておりました評議員会を、本年より再開することといたしました。会員のニーズを幅広く把握するために、評議員会構成メン

バーをさらに充実させて、将来活躍が期待される比較的若手の研究者や産業界会員の方も含めて、より多くの会員が自由に物申す機会とさせて頂きたいと思っております。復活後の評議員会は本年6月の年會に日程を合わせます。膜学会でご活躍の会員の皆様からのさらなるお力添えをお願い申し上げます。

#### 2. 国際化・若手の活躍

早いもので、来年7月には、国際膜学会議、ICOM2023が幕張で開催されます。山口猛央副会長を中心として準備が着々と進められているところですが、本年は、さらに準備が本格的となり、具体的内容が見えてくるものと存じます。日本膜学会の特徴を活かして、人工膜・境界膜に加えて生体膜のセッションが設けられるなど、特色ある国際会議となることが期待されます。横浜で開催されたICOM1996以来27年ぶりの国内開催ということで、前回参加された方には四半世紀の間の変遷を感じ取って頂き、また、初めて参加される方にも、それぞれ思うところがあることと存じます。いずれにしましても、ICOM2023の成功に向けて会員の皆様方の一層のご支援をお願いするところです。

一方で、将来の膜学会を担う若手会員の活躍も非常に重要と考えております。年会シンポジウムの企画、若手セッション、膜誌におけるミニ総説の企画など、次代を担う研究者の活躍の場を進んで提供し、サポートして参りたいと思っております。

#### 3. 情報の発信・会員への還元

本年も膜学会会員の皆様に少しでも多くの有益な情報を提供して参ります。会員の皆様がメールマガジンや膜誌の総説記事など最大限活用いただき、知識や情報の積極的な取得に向けて貢献できればと考えております。また、情報源としての膜誌への積極的な投稿をお願い申し上げます。

さらに、本年1月には、「膜学実験法」講習会が、3月には二酸化炭素分離膜についての講演会が開催されます。コロナ禍の中でオンライン形式での開催となりますが、貴重な情報源としてご活用いただければ幸いです。

会員の皆様方には、本年も膜学会の活動にご支援の程宜しくお願い申し上げますとともに、今後の膜学会の発展のために一層のご指導ご鞭撻をいただければ幸いです。